岐　阜　新　聞
2012年(平成24年)7月16日　月曜日

教えてホームドクター

脳や心臓、足で発生

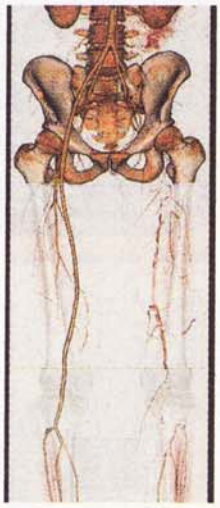
アテローム血栓症

循環器内科医
松尾仁司氏

脳や心臓、そして足の動脈に血栓が詰まる原因となるのがアテローム血栓症です。動脈硬化は加齢や長期間のリスク因子への暴露により全身の動脈に発生します。動脈硬化の初期病変は、すでに10歳代より認められるといわれています。

傷害された血管の表面を覆っている血管内皮より、悪玉コレステロールが血管内皮下にとりこまれると、単球が内皮下にすべりこみ、マクロファージという貪食細胞に変化し泡沫(ほうまつ)細胞化し、その後、死滅して動脈硬化巣が形成されます。

この動脈硬化巣が成長して血管の狭窄(きょうさく)が生じるといわれています。その後、この動脈硬化巣の表面に血栓が形成され、急速な血管の閉塞を生じて、疾患を引き起こすと考えられています。頭の動脈で発生すれば脳梗塞、脳虚血発作、心臓の冠動脈で発生すれば心筋梗塞、狭心症、下肢の血管で発生すれば閉塞性動脈硬化症、壊疽(えそ)を引き起こします。



CTで評価した下肢動脈造影

このような動脈硬化の発生や進行を促進する因子が高血圧、糖尿病、脂質異常症、喫煙です。このような変化は、全身の動脈で生じていることが多いと考えられています。

全世界の施設が協力して行ったアテローム血栓症の発生頻度の調査から、以下のようなデータが明らかになっています。

すなわち、狭心症や心筋梗塞の診断をうけた患者の25%に脳血管や足の動脈硬化を合併、脳卒中の患者の40%に心臓や足の動脈硬化疾患を合併、足の動脈硬化を持つ患者の60%に心臓、脳血管に動脈硬化を合併します。このような事実から、動脈硬化の危険因子を複数有している、あるいは動脈硬化が原因と考えられる病気が発症した場合には、全身の動脈硬化を評価することが大変重要であるといえます。

では、このような全身の動脈硬化は、どのように診断するのでしょうか？　以前はカテーテルという侵襲的診断法をもちいないと動脈硬化の評価が困難でありましたが、現在は非侵襲的画像診断の進歩により、全身の動脈硬化を有効に評価することが可能となりました。

特にCTの進歩は目覚ましく、全身の動脈硬化の有無を短時間で評価することを可能としました。頭から下肢までの全身動脈の狭窄や閉塞、瘤(りゅう)形成の有無を明確に判定することが可能となっています。

脳梗塞や心筋梗塞、閉塞性動脈硬化症は、いずれも発症すれば日常生活の活動性を著しく低下させ、生命をおびやかす病気であり、早期発見、早期治療が重要です。動脈硬化の危険因子を複数持っておられる方には専門医の受診を強くお勧めします。

(岐阜ハートセンター循環器内科部長・岐阜市薮田南)

全身の動脈硬化、CTで診断